

## 宗教々育と宗教生活への内省 (二)

近 藤 了 徹

### 十

以上、生活の具體的基礎としての三つの言葉について見極めて來た。夫は生産、淨化、調和である。この三つが具備された相貌こそ、人格的顯現であり、夫れへの努力によつてのみ、生活態度の向上が期せられ、其の努力は教育する事に依つて達せられると云ふ意味のことを考へて來たつもりである。生産の本質的意味淨化の本來の意味調和の根據を考へて來たのであるが、然し人生への眞の餌としての人格を通しては如何なるものとして具體化されてをるか考へることを怠つて來たのである。即ち夫れは吾々の感性と悟性とに直接に受け入れられる力としての顯現である。それは吾々が知らず／＼のうちに感化されゆく崇きものである。全く吾々はこの精神的根據に立ちて行動し行爲する、即ち思惟し考察し内省し而して具體化する。而して如斯き努力あつてこそ吾々の眞實の精神生活はあり得るのである。

其事に就て述べる前に、教育すると云ふ事がお互の上に及ぼすものを先づ見極めて見たいと思

ふ。既に、自からが自からを教育する即ち自己の生活進轉の中に於て教育することがなければ、生活は出来ないと言ふ事を述べて來たのであるが、こゝでは教育者と被教育者との關係に就て考へて見たい。生命と生命と觸れ合ふ教育者と被教育者とに就て思ふに、教育するものは先づ自からを教育するものでなければならぬ。而して自からを教育する努力こそ感化の大なるものであらふ。この行き方は自から責任を負ふものゝ當然の眞實の心情であり、自からの言葉を眞ならしむる誠意でもある。而して被教育者の人格のうちに自己を見出すこと、これが最も大切な事である。被教育者の裡に動くものに於て自己を發見するに至ると、只管に未熟なりし過去の生活、知つて又知らずして行じ來たりし多くの過に對して懺悔せざるを得ない心情になる。吾々は斷じて心おこれる者であつてはならない。その片鱗を見せるだけでも、道を求めてゐると云ふことゝ深く矛盾するのである。自己を否定し得たと力みつゝ内實は何時の間にか自己を主張してゐることを、吾々はしばしば見出だす。自己を主張してゐる心は他人を容れない心である。

それは己に修業が出来てゐないと云ふことを示すものであり、又教育することを忘れてゐることを示すものである。殊に法衣を着てゐる者としては、そこに甚だしき矛盾を感じざるを得ないのである。誠に教育者は被教育者の中に過去に於ける吾が姿を見、現在に於ける吾が生命を感じるのである。

道元の正法眼藏隨聞記の中に被教育者の修業態度としてとるべき道を手厳しく誠めてゐるのを見  
るが、吾々は修業するものゝ我見偏執は竟に救ふ可からざる外道の中に吾々を沈倫せしめるであら  
ふことを痛切に覺ゆる。

タトヒ佛トイフハ、我が本ヨリ知リタリツルヤウハ、相好光明具足シ說法利生ノ徳アリシ釋迦彌  
陀等ヲ佛ト知リタリトモ、智識若シ佛ト云フハ蝦夷蚯蚓ゾト云ハ、蝦夷蚯蚓ヲ是ゾ佛ト信ジテ日  
ゴロノ知解ヲ捨ツベキナリ。

我が所學多年ノ功ツメリ、ナンゾタヤスク捨テンヤト猶心深ク思フ、即チ此心ヲ生死繫縛ノ心ト  
ハイフナリ。

佛道ニ入ルニハ、我が心ニ善惡ヲ分ケテヨシト思ヒアシト思フコトヲ棄テ、我が身ヨカラン我  
ガ意ロナントアラント思フコ、ロヲ忘レテ、善クモアレ惡クモアレ佛祖ノ言語行履ニ隨ヒ行クナリ  
吾ガ心ニヨシト思ヒ亦世人ノヨシト思フコト、必ズシモ善カラズ。然アレバ人ヲモワスレ吾ガ意ロ  
ヲモステ、佛教ニ隨ヒユクナリ。

道元の如斯言葉は即ち被教育者のとるべき道即ち吾々としての生産價值への全き方向を示せるも  
のである。吾々の人間的理性への執着をひと先づ斷ち切つて智もなく學もなく愚かなること幼児の

如きものとなつて己自身が失はれる時、大なる宇宙精神の手に抱かれてゐる新らしき生命の全貌が顯現する。この意味に於て理性の否定は宗教への一つの通路であることを知るべきである。即ち道元の言葉は正に宗教人たんとするものゝ指標である。あるものを捨てよとは、それを役に立たなくすることではなく、それを持つるものとして即ち自己のものとしての所有感や慾念や執着から開放されると云ふことである。即ち只一つのものゝ全能力を發揮する場合に於て、邪魔になるもの一切からそれが開放されることである。有るものをして自由に全能力を發揮せしめる爲めの「捨」であることに外ならないのである。

己を捨てることは、自己を打ちすてゝの生活であり、とりもなほさず奉仕の姿である。この生活は、修業するものに取りて、平常底であり、自己を見自己を覺る最も近き道ではあるまいか。

自由は中心生命に生きる即ち全能力を發揮する爲めの自己開放である。然し乍ら自己開放と云ふことは吾々の常識からの開放でもなく理論や規範からの絶縁でもない。自己の創意と精神進轉とを價值づけながら、夫等の中に在つて罣礙なき底の心境である。字義から云へば自由とは自からに卒由することであり、内實から云へば何等の意志もなく思念もなく濁れるものもなく又混れるものもない其者自體の本然の姿である。夫れは吾々が達せんとして努力してゐる窮極の目的地であり安住地である。即ち道を求むる者の理想境である。卒由するとはこの理想境に素直に頭を下げる事であ

り、素直に頭を垂るゝ姿は理想への素直なる歩みとなり、素直なるが故に、若し師が佛は蛙なりと仰せらるれば、無條件無批判に夫れを信じ得る様になる。「自」と「由」とは、かくして教育者と被教育者との關係に立つ。このことは、吾々自からの内なる生活に就て考へる事が出来るし又師と弟子との關係に就ても考へることが出来る。被教育者の信賴に依つて彼と教育者と一枚となつた時對立的意志といふものはなく超對立の對立の場が顯現して來る。その姿は、嚴肅なる美觀であり、合掌の世界であり、最も生産價值の高い生活態度である。この姿は、自己に在ては天真そのものであり、他の場合に在ては信賴一味の世界である。こゝに到て、吾々は「捨」を行ひながら捨つべき何者をも見出さないであらふ。即ち捨て切つた處に眞の意味に於ける「生き」の生活があり地上生活に即せる無限なる願行の世界があるのである。

以上、法衣を着けて修業するもの、「生キテユク」「生活シテユク」「教育シテユク」事に就ての反省と方向と態度とに關して述べて來たつもりである。

## 十二

吾々の無雜作なる心疎野なる心はまだ練れてゐない心であり、その爲めに、一ち一ちの行爲行動に於て單的に物の眞なる姿に觸れ得ない。自分だけの之れまでの氣儘なる心や言葉や態度を省みて今更ながら漸汗極まりないものを屢々感ずる。吾々が自分だけの經驗や體驗乃至學問智識等に於て

のみ生きて行かうとすれば、恐らく夫れは愚かしきものゝ最も良き見本であらう。人を笑ふ前  
からを省みる時、自己の渡世振りには恐らく如何なる人も恐縮するであらう。然し、吾々は、生活  
に於て自他の關係にのみ捕はれてはならない。吾々の生活は、法衣を着て居り乍らも、知らず知ら  
ず、かゝる關係に墮ちて居る。夫れは他に捕はれるからせあり自からに頼りすぎるからである。他  
に興味を持たたがるからであり自からにうぬぼれるからである。吾々の地上生活に於て、人間の生  
命の嚴肅にふれる時、又自からの何者にも及ばない微力を自覺する時、吾々の心は彼の敬虔なる  
ものゝ中に融け入りたい程の憧憬を感ずるものである。

敬虔とは敬ひ懼れツ、シム心であつて、目に見えざるもの人智の及ばざるところのもの人力の到  
底及ばざる處のものに對して、天警として自からを自肅自戒する心である。自からの無力を自覺し  
大いなる力の加被力に只管に合掌してゐる姿である。敬ふと云ふ事は仰ぐ態度である。眞實を知ら  
場合の意志である。故に敬する心それ自體に在つて始めて自己の玉成が期せられるのである。それ  
は勿論形式ではなく精神であり心柄から來るものである。自からに徹底せんとするものゝ態度であ  
り、自からに徹したものゝ自からなる態度である。眞の意味に於て自からの尊嚴を識るものは自から  
を敬し又一切を敬してゆく、否敬して行かざるを得ないのである。従て自肅自戒するつゝしみの態  
度になるのである。自からと他の一切に依つて、生かしめられ、生活せしめられてゐることを自覺

する者の必然の態度である。吾々は相互の恩恵に依つて生きてゐるのであり、皆等しく大自然の恩澤に依つて生きてゐるのである。寔に、お互に融合し與へ捧げ譲り合ふところに、吾々の麗わしき生活があるのである。一つの物品でも多くの人の努力に依つて始めて只一つのものとして完成されたのであることを思ふ時、吾々は吾々に與へられてゐる限りなき力即加被力を自覺せざるを得ない。かくて敬虔なる心は自肅自戒に富む。そしてこの心は脚の底に限りなき温かき泉の源のあることに氣付くであらう。掬めども掬めども盡きることなき個心の底に湧き出づる泉は、そのまゝ人格的存在として自己をより崇きものにして呉れるであらう。

かくて、敬虔なる心は、吾々に於ては、佛祖に對しては限りなき追慕の至情となつて現じて來るのであり、人に對しては仕ふる如き心になるのである。この心に生きる道を歩むものは、この道が尊ぶべき只一つの道であることを知る。

平常に於て吾々は對立の相を以て現じてをる何かの契機に觸れると、時を得たり顔に、其の心は對者に何かの言ひ分を持つて來る。練れてゐない心は、感情の奴となり論理の奴となり而して三毒の捕虜となつて、其處に現じ勝ちである。その場合例へば禪僧で最も嚴肅なるべき坐の場合に於てすら、兎角感覺や言動に歪みを生ぜしめてをるお互なるを思ふ時、人間のあさましきを感じないわけにゆかない。敬虔なる心の具體的顯現は合掌の相であるが、この合掌は、自からの精神に於ける

無限なるヘリクダル内容を持つてゐると同時に事々に感謝する限りなき温情が溢れておらなければならぬ。夫れは眞に人間らしき姿である。而してかゝる心情の根底をなす心境として謙虚を考へるべきであらう。

へり下る心は、何等の計ひもなき虚なる心であり天真なる姿であつて、内に何者をも藏しない即ち宇宙精神の素直なる姿である。心オゴルル者でもなく、オゴルべき何者も藏しないのである。この心は人生に對して無限なる感謝を含み、お互の生活に於てお互の本質に生きてをる姿である。自己自身の在り方の中に自然に現じてをる姿であつて、純粹なる崇き例へば皎々たる月の如き觀を呈してをる。

敬虔なる心が一切の者に向つて合掌し感謝し自肅自戒の歩みを續ける時、謙虚なる心は、一切からとらはれる事なく而も一切に則して、一切の對立を離れて自から天真なる歩を進めて行く。思ふに、謙虚は大自然の裡に「在る」姿であり、大自然其者と云ふてもよいであらう。而て、かゝる謙虚より流れ出づる情操は即ち敬虔である。寔に謙虚なる心は悟り切つた人々の心境であり、天真なる積極性もこゝから産れて來るものであらう。

### 十三

次ぎに來るべきものは親切である。親切は身を切る様な思ひで切々他人を思ふ實情であり、同時



に身を切る様な心で自己に切實なる態度である。又親しき心が陸まじく行き合ひ具體化されて行く消息である。吾々道念に生きるもの行者として法衣を着てをる者に取つては、見へざるものに對しても心から表裏なく行きとゞかせて行く心である。一物一品事々物々に捧げ奉じて行く心構ひに於て、親切の眞の崇き具體化を見ることが出来る。それは宗教の座であり、その心に佛への生きた思慕が存し、それから解脱への努力が活潑に行はれる。それは利害の問題や實利的行動を振りすて、只管に捧げ奉じて行く道念として現れる。吾々は、佛への思慕の故に解脱への心の外には一切の餘念が無い筈である。従て、一つのことごとに、全努力を行き届かせて行くことは、吾々修業する者の日常行持の上に於て最も必要なことである。一と皿の料理でも、温かな心を持たしてあるものとそうでないものとは、己にそれを見る者の目の感じが違ふ。其の味も亦固より左様である。立派な家庭などで見ることの出来る、その人々の立居振舞は、何か吾々より優れたものがあるのを感じる。和やかさと崇きとを感じさせて呉れる。而かも其處に一つの藝術味を感じることが出来る。家庭の人々の心の持ち方、人生に處する考へ方が香り高いものを持つて居るからであらう。私はいつも如斯家庭に入つて、人生に對してのゆかしき慈念と深き理念とを感じ、學ぶものが多かつた。自分が餘り粗野なるナゲヤリな自分であつたからである。而も、人の上に坐り人の信頼をうけて行くべき者なるを思ふ時、眞に泌々と感ずるものがあつたのである。

親切なるものゝ崇さはやがて菩薩願行への大願に生きることを要請する。人々個々具有する夫々の佛心に合掌する崇き心は、其人の一切の餘念に對して哀憐を感じる。只管に其人の佛心に合掌する心は其儘佛國土に住む心であり、教の如く人心に應感する心である。一切の期待から離れて、個心に切々止み難き崇き情愛を以て合掌することこそ、地上生活を營める個々の生命への最も親切なる奉仕であらう。衆生への無限なる親しみは慈しみに轉ずるであらう。これは結局菩薩大願への一筋道であると思ふ。

#### 十四

私は、且て、巧利的な考へから又實利的な歩み方からでなく尊ばれ親しまれ愛されることは、仲々至難な大事業であると云ふた。今、敬虔謙虛親切の意味と内容を辿つて來て、端なくも、敬虔なる人こそ眞に尊ばれ、謙虛なる人にこそ愛される所以があり、親切なる人にこそ親しまれる仔細がある事を知つたのである。地上生活を營む吾々自身を教育する事に對して、「如何にせば良いか」と云ふ事に對して、こゝに答を得た次第である。

吾々は、人格の顯現されたる者として、如斯崇き教育を自分自身になすべき事の當然性を考へて來た。斯の如き姿は、期せずして、他に深き感化を與へずには措かないであらう。如斯精神の純一なる歸納に於て、吾々は一味の合掌の世界を豫想する。これは一切が生産さるゝ母胎であつて、こ

の姿の中には淨化されたるもの又調和されたるものを含む。人格完成へ！人格完成へ！と向ふ旅は如斯きを信念すると共に個身の内に居ます佛への合掌を忘れぬことである。

この合掌より出づる徳目は人間生活を正しく理解する處に存する。従て體驗の人間だけに附與される心境である。故に、この體驗より來る態度は、眞に生きつゝある人間に於て、必然的に生れて來るものであつて決して作爲さるべきものではない。この事實即ち眞理に根據を持つつまり本當の生活に徹底して行かふとするところに、眞の「教育すること」と「生活すること」の意義が存する。故に、教育者は精神に根本的用意をせねばならないし、被教育者が本當の生活を爲すことを祈願すべきである。然し、夫れは、被教育者の中樞生命より湧き出づる止み難き道念——日々の生活に於ける所作動作實行の上に溢れて來る道念への熱情に待たなければならぬ。

以上、私は自からの内に於ける又吾々お互の生活の上に於ける生活する教育することを見極めて來たつもりである。この兩者をして吾々の生きの世界に現せしむるものこそ尊いものと云はねばならない。道念に満ちくたる生活をせんとするものは、先づ自己が信じ得る自己であるかを見極めねばならないし、又納得され得る自己であるかを見極めねばならない。而て、夫れは聽て行として吾々に具體化されなければならぬやうになるであらう。

教育すること生活することは、宗教に關する限りに於ては、我れと我れ自からに云ひ聞かすことであり、自からの生活の内に具現する道行きでなければならぬ。宗教への思念としての精神の最高峯へ上る吾々の歩みの爲めに、始めに、親しまれ、愛され、尊ばれることの仔細に觸れ、次にそれ等が心理的に連繋を持つ親切、謙虛、敬虔といふ事に就いて内省して來た。而して如斯意味に於て又調和、淨化、生産との内容について私見を述べて來たのである。吾々は、一度敬虔なる事實にふれ、謙虛なる姿に還り、自他利益の願行の爲めに親切を行するならば、いさゞか道に近きものあらうと信する。(完)